としょぶらり
米子高専図書館情報センター報

ISSN 1344－5634
第 92 号
平成23年12月20日発行
米子工業高等専門学校
図書館情報センター

11/3～4文化祭の古本市の様子＜図書館ロビーにて＞

学生図書委員会の総意で、古本市の収益金８，４００円は東日本大震災義援金として寄付しました。古本市にご協力頂いた方々には紙面を借りてお礼申し上げます。

目　次

平成 23 年（第 38 回）校内読書・エッセイコンクール優秀作品発表

読書・エッセイコンクール講評 ……2

〈読書感想文の部〉

最優秀賞	電気情報工学科	1年	仲沢　梨央	「地獄変」を読んで	……3
優 秀 賞	電気情報工学科	1年	吉高由里子	「神様のカルテ」を読んで	……4
優 秀 賞	電子制御工学科	1年	勝部　択智	ユニークな人だけが成功する	……4
優 秀 賞	物質工学科	1年	來福ななみ	「園芸少年」を読んで	……5
佳　　作	物質工学科	1年	さんしょうお	マーフィーの法則	……6
佳　　作	物質工学科	1年	井田　大貴	「甲子園への遺言」を読んで	……6

〈エッセイの部〉

最優秀賞	物質工学科	1年	坂根すず香	共に生きるために	……7
優 秀 賞	電気情報工学科	1年	島根　奈月	一言の重み	……8
優 秀 賞	物質工学科	1年	小林　美優	あたりまえな日々	……9
佳　　作	機械工学科	1年	権藤　正也	こんな旅がしてみたい	……10
佳　　作	電気情報工学科	1年	片岡　範行	再利用を心がけでゴミを減そう	……10
佳　　作	電気情報工学科	1年	ゴ　　リ	頑張れる、日本	……11
佳　　作	電気情報工学科	1年	中山　健太	ふと感じる幸せ	……12

平成23年度（第38回）

校内読書・エッセイコンクール優秀作品

読書・エッセイコンクール講評

国語科　松崎　安子

今年のコンクールへの応募は読書感想文が106編、エッセイが39編で、すべてが１年生による作品であった。作品の多くが、高専生としてはじめて経験する長い夏休みに、読書やさまざまな体験に挑み、それらを通して感じたことを、じつに素直に綴っていた。

以下に、入賞作品について講評していく。

感想文の部最優秀賞「『地獄変』を読んで」は、絵師・良秀が持つ芸術への信念を読みとりながらも、その信念を貫いたことが果たして彼の人生においては幸せなことだったのだろうかと、葛藤している。スペシャリストの世界は複雑怪奇だが、そういった理解しがたいものの中から、自らの今後の生き方のヒントを見つけ出そうとしている意欲的な文章であった。

優秀賞の三点は、まだ見ぬ将来への不安を抱える高専生が、なにかをつかもうと一歩踏み出す姿を想像させる書きぶりであった。「『神様のカルテ』を読んで」は、主人公・一止が医者として抱く理想と、それを阻む現実にぶつかり悩みながらも強く前に進んでいく姿に勇気を与えられたと述べる。「『ユニークな人だけが成功する』」では、これから世の中に飛び出して行く自分達には、机上での勉強によって得られた知識だけではなく、精神的な強さも大切になってくることを発見している。「『園芸少年』をよんで」は、主人公の中学生たちが園芸部での活動を通して成長していく様子を、自らの過去の経験と重ねながら丁寧に読みこんでいると感じた。これまで後ろ向きだった読み手の気持ちが、登場人物たちの行動に触発され、前へ向けられたことは成果として喜ばしい。

佳作「『マーフィーの法則』」でも、前向きな気持ちを獲得した読み手の感想が述べられるが、そこには、これからどんな困難が待ち構えていようともあっけらかんと笑い飛ばしていくだろうと思わせるような強ささえ見え隠れしている。同じく佳作の「『甲子園への遺言』を読んで」は、作りものではない一人のひとの生き方に突き動かされ、憧れを抱き、自分の生き方の目標と定めている。

エッセイの部最優秀賞「共に生きるために」は、現代社会において全世界が背負っている環境問題について、じつは人間の想像力の欠如が事態を助長させていると鋭く指摘する。そして、世界的規模の環境危機を一人ひとりが自分のこととして引き受ける想像力こそが、問題改善の発想を生む力へとつながると提言する。

優秀賞の二点はいずれも、身近に有るために見逃しがちになってしまっていることがらについてよく見つめている作品であった。「一言の重み」では、日常生活での様々な場面、様々な人の間で交わされる言葉が持つちからに着目した。優秀賞「あたりまえな日々」と、佳作「頑張れる日本」、「ふと感じる幸せ」は、今年3月11日に起きた東日本大震災の映像を見たことがきっかけとなり、あたりまえな日々こそが一番大切なことであるとシンプルかつ虚心に述べている。社会としても個人としても価値観が多様化し続けているといわれる中で、その逆を行くようでいて、しかし本質に迫るような新鮮な意見である。佳作「こんな旅がしてみたい」では、書き手の想像する一人静かな旅が、それこそ静かに語り紡がれ、お伽噺のような世界をつくり出しており、知らず知らず引き込まれてしまう。佳作「再利用を心がけてゴミを減らそう」では、自らが実践しているレジ袋の再利用法を紹介し、ともすれば大きくとらえがちなゴミ問題について、地に足のついた意見を展開している。

さて、コンクールへの応募作品の中には、残念なことにWebからの引き写しや模倣、断り書きのない引用が見られた。今回、そういった作品を出してしまった学生に一言、自分と向き合うことを恐れないでほしい、と言いたい。たしかに、読書感想文やエッセーというものは、書き進めるうちにそこへなぜか自分の経験が否応なしに滲み出て来、自分という人間がどういう人間なのかということがあらわに眼前に突きつけられる。それが苦痛で、逃げてしまいたくなるのもうなづける。だが、そこでぐっととどまり、今の自分をしっかり見据えることも大切なのではないか。己を知ることを先延ばしにせず、果敢に向かっていくことが、読書感想文やエッセーを自力で書きあげるコツと言えるかもしれない。

読書感想文の部

最優秀賞

「地獄変」を読んで

電気情報工学科１年　仲沢　梨央

人が信念や誇りを貫き通すことは正しいことなのだろうか。これは、この作品を読んで私が初めに思った疑問である。

この物語には、良秀という高名な絵師が登場する。彼は、けちで、欲張りで、恥知らずで、怠けもので、強欲で、横柄で、高慢で、その上、天が下で自分ほど偉い人間はないと思っていた男である。彼は、自分の絵のために、弟子を危険にさらすこともあった。

私は、彼の生き方に共感できる部分があまりなかった。彼は、絵に関しては本当に熱心で、芸術に生きた人と言えるだろう。その点では、彼はすばらしいと思う。しかし、そのために、人を邪険に扱った彼の行いに共感することはできない。私は、自分の信念のために他人を巻き込むのはよくないのではないだろうかと思った。でも、彼が自分の信念のためにそこまでする人だったのは、本当の絵師である証なのだろうとも思った。

そんな良秀には、まるで気違いのように可愛がっている一人娘がいた。その娘は、堀川の大殿様のところへ小女房に上っていた。また、その娘は良秀には似つかない、愛嬌のある娘だったので、御台様をはじめ女房たちにも可愛がられていた。そして、この物語は、大殿様につかえている「私」が客観的に見た様子を描いているが、その大殿様のついて主観的になっている部分が物語のはじめの方に多くある。

私は、この主観的な部分に「私」の心を映し出しているのだと思う。そして、私は、大殿様は「私」が思っているよりも、ずっと冷酷な人だと感じることが多かった。また、徐々に良秀に対して主観的になる部分が多くなるので、「私」が良秀に感情移入してくるのが分かった。

大殿様は、良秀に屏風に地獄変を描くよう申しつけた。良秀は、屏風に描く人々を、弟子に危険を犯させ、その様子を見て描いた。しかし、良秀は、檳榔毛の車と、それに乗った黒髪の女が火に焼かれている様子を見たことがなかったので、その絵を描くことができなかった。そして、良秀は、その様子を見せてもらえるように大殿様に願い出た。大殿様は、その願いを聞き入れたのだが、火を付けた車に乗っていたのは、良秀の娘であった。

良秀は、まさか自分の願いで娘が殺されるとは思っていなかっただろうと思う。娘が車に乗っているのを知って、その瞬間に火をつけられたときには、もはや生きた心地がしないほど衝撃的であっただろう。しかし、良秀は火がつけられたとき、あんなに可愛がっていた娘を助けようと火の中に飛び込むことはしなかった。それは、娘をも見捨ててしまう芸術への信念があったことを感じさせる。良秀は、娘を失うかわりに、その光景を絵のために、胸に強く焼き付けたことだろう。

車に火がつけられ燃え盛る中、火の中に飛び込んだものがいる。それは、良秀と名付けられ、娘から片時もはなれないぐらい娘に懐いている猿だった。

私は、この猿を良秀の分身のようだと思った。良秀には、きっと２つの道があった。一つは、芸術に生きる道で、もう一つは、娘への愛に生きる道である。良秀は、芸術を選んだが、もし娘を選んだなら、この猿のように飛び込んでいったのだろう。

そして、良秀は、地獄変の屏風を完成させた。その絵は、見るものを驚かせた。

私は、良秀はこの絵の中に、失った娘を生き返らせたのではないかと思った。そして、その絵は、見たものに大苦艱を感じさせるほどに、地獄だったのだろう。それは、彼の心が地獄を持っていたからだと思う。彼は、夢の中で地獄を見ることもあった。それは、彼が今まで見てきた地獄が、彼の心に届いていたのではないだろうか。

屏風が出来上がった次の夜、良秀は、自殺した。その理由を、「私は」は、一人娘を先立てたあの男は、恐らく安閑として生きながらえるのに堪えられなかったからだと考えている。

私は、良秀が自殺した理由は、それだけではなかったと思う。良秀が自殺したのは、芸術への信念で、娘を殺してしまった自分に、恐怖を感じたからではないだろうか。

彼が、自分の信念を貫いたことは、間違いだったのかどうか、私には分からない。しかし、この物語は、生き方を強く私に問いかけた。私は、自分の道に勇気と自信を持てるよう生き方を探していきたいと思った。

優秀賞

「神様のカルテ」を読んで

電気情報工学科１年　吉高　由里子

理想と現実は大きく違います。現実に戸惑い、苦しんでも、私たちはそれと向き合って生きていかなくてはいけません。

私は理想とは大きく違う現実にぶつかり、自分は何をしているんだろう、なんでうまくいかないんだろう、どうすればいいんだろうと悩んでいる時がありました。

そんな時出会ったのがこの「神様のカルテ」でした。

この本の主人公、栗原一止も医者として、人として、自分はどうあればいいのか、どうあるべきか、何がいい医者なのか、毎日悩み、苦しんでいました。

医者として患者さんの治療をすることはもちろん当たり前で、大学病院に行き、技術を身に付けることも間違いではありません。しかし、最先端の研究をしたり、患者さんの望まない延命治療をしてまで命をつなぐことが本当にいい医者としての仕事なのだろうか……

一止にとってその答えとなったのは安曇さんとの出会いでした。

末期ガン患者の安曇さんを救えないとわかった時、一止は自分に何ができるのか日々悩み続け、最後に出した答えは安曇さんの願いをできるだけ叶え、最期まで寄り添うことでした。

安曇さんの命は救えなかったけれど、心は救えたと気づいた時、一止は医者としての本当のよろこびを感じ、これからも人の心に寄り添える医者になることを選びました。

私が一止だったら……

大学病院で新たな技術を身に付け、もっと大きな所でたくさんの人の命を救うことを選ぶかもしれません。

私は、お医者さんの立場としては、きっとどちらも間違いではないのだと思います。

しかし、医者として無力でも、人として救えるものがあることに気づき、これからも人の心に寄り添える医者になろうと決意した一止を尊敬したいと思います。

私は今までそんなことで悩んでいるなんてくだらないんじゃないかと思っていました。

けれど私のそんな考えを変えたのはこの本との出会いでした。

悩みながらも毎日必死で働いている一止や、がんばって生きている安曇さんを見て、悩まなかったり苦まない人なんかいなくて、理想と現実は違うけれど、受けとめて前に進んでいかないといけないんだと気づかされました。

きっとそれが自分に与えられた道だと思うからです。

私はまだこの先どうなるかわからないし、どうしていけばいいのかはっきりとした答えはでていないけれど、一止の姿にとても勇気をもらいました。

これから先苦しいことはあっても、その中で後悔しないように自分のできることを精一杯やって、少しでもその苦しさを楽しさや、自分の強さに変えていけるようにしたいと思います。

優秀賞

ユニークな人だけが成功する

電子制御工学科１年　勝部　択智

就職氷河期と言われている中、自分も少しずつ就職に直接関わってきます。高等専門学校の就職率はほぼ百パーセントだそうですが、企業の方達はどのような人材を求めているのか気になることもあります。

「ユニークな人だけが成功する」という本の端書きには、「従来のような秀才型の人では駄目だ。ユニーク性のある肝っ玉のすわった人でないと」というような企業の言葉が書かれています。特色のある個性をもった人、一本芯を持った人は企業にとって滅多にお目にかかれないらしいです。確かに、同じ企業の中の人とは違う特徴をもった人を取り入れることは、異なった意見を増やし戦略幅を広げることもできて、企業にとっても必要不可欠だと思います。

個性と才能を持った人達が必要とされているのが分かりましたが、企業にとって望む個性とは具体的にどのようなものなのでしょうか。私自身、改めて考えてみると、何が個性で、何がそうでないのかはっきりとした区別も分からない状態でした。「個性を培養する」において、自分の個性を発見するのに一

番よいのは、「自分に自信をもつこと」です。具体的には、くよくよしない、あくせくしない、おどおどしないということが大切だということです。特にあくせくしないことは、掘り起こした個性を評価する人が見つからなくてもあせらないということで、私はここに自分が問われているような印象を受けました。私は昔から気が弱い部分が多く、たよりになれる人がいないとどうしようもできない性格でした。この言葉からは、今までの短所を克服し、自分の力で自分に自信をもてるくじけない心を持てと言われているような気分がします。

企業が望むユニークな個性とはこの三つの気持ちによって見つけだされたものであると私は思います。積極性があり、自分に確かな自信を持つことによって企業からも認められるような人になれるのだと考えています。

私はよく、自分が失敗をしない最善の道を選びたいと思いがちですが、この本には何回か「チャレンジ心と生きがい」と言ったような内容があり、それに私は驚いたりもしました。その中で、一流企業の秘書の話では、他の秘書は社長に従順にしていたが、私はよく社長に刃向かっていた、というものだった。私が今まで思っていた事とまるで違うことだったのです。従順ではないというリスクを伴うのも立派なユニークな個性だと評価しているのには興味を持ちました。個性の表わし方の多様さに気づかされました。

ユニークな個性を職場で表すのが成功の鍵だと語っていますが、私が想定していたように、組織の中には、ユニーク性があることで嫌われる事もあるのだというのです。これに関連して、企業が倒産する大きな理由に、ユニークな才能を持った人を孤立化してしまうことだと言うのです。毎年ニュース等で倒産した企業の数の話をよく耳にしていますが、倒産する根本的な理由についてあまり知りませんでした。不況の中倒産を起こさないようにするには、ユニークな個性を持つ人の活躍が必要なのではないかと思います。

私達は日々勉強をして就職や進学などを目指していますが、それと同じくらいに、自分の個性を発揮すること、それを実行するためのたゆまない強い自信を持つことを目指していかないといけないのではないかと思います。

優秀賞

「園芸少年」を読んで

物質工学科１年　來福　ななみ

事なかれ主義で、日々をなんとなく過ごしている主人公篠崎。見た目は不良のままだが、中学時代の不良仲間から抜け出そうとしている実は心優しい大和田。いじめられた経験から、段ボールをかぶり顔を隠して相談室登校を続ける庄司。もし同じクラスであったとしても友達になどなれないであろう三人はひょんなことから園芸部に入り、一緒に活動するようになる。「園芸少年」は、不器用な男子高校生三人が園芸部の活動を通じてそれぞれに成長していく物語である。

自分には、この三人にとっての園芸部のようなものがあるだろうか。この話を読んだあと、一番に考えたのがそれである。三人にとっての園芸部。それは本気で取り組めることであり、仲間と共に夢中で過ごせる時間であり、そして自分を変えるきっかけでもあった。そんなものが自分にはあるか。答えはノーである。中学のときは部活に入っていて、毎日きちんと参加した。習い事もいくつかは経験していて、その中でも習字は今でも続けている。しかし、それら全てに本気だったかと言われれば、それは違うのである。中学のとき部活に入っていたのは絶対何かしらの部に入らなければならなかったからだし、毎日参加していたのも別にやりがいがあったからという訳ではない。習い事も、やりたくないとまでは思わないが、特にやりたいとも思わず、なんとなく続けていた、もしくは続けているというだけなのである。だからこそ、うらやましいと思った。園芸部というものに出会えた三人が。

物語の中で三人はそれぞれに成長していくが、一番印象深いのは主人公である篠崎の変化である。篠崎はどこか冷めていて面倒事が嫌いな、本当にどこにでもいるような人物だ。私にも共感できるところがいくつもある。だから余計に、篠崎の変化は心に残った。そんな篠崎の変化がわかるエピソードはいくつかあるが、その中でも印象に残っているものがある。

篠崎は、近所にある写真のスピード印刷店の前に置かれている鉢の花がしおれていることに気づく。店の人が、水やり忘れているのである。しばらくは見ているだけだったものの、ある日決心してその花

の手入れをし、店の人へ、「水をかけて下さい」というメモを残した。

自分だったら。まず、しおれている花に気づくことができるだろうか。それから、自分にできることを考えつけるだろうか。そして最後、考えついたことを行動に移せるだろうか。初めの二つはきっとその時々だと思う。しかし行動に移すということは絶対に無理だ。少なくても、今の自分では。

本気になれるようなことが見つかるとは正直思えない。けれど、見つけてみたいとも思う。私にとっては本気になれることそのものだけでなく、それを見つける過程もきっと自分を変えるきっかけとなる。そう思うからこそ、ゆっくりとでも本気になれる何かを探していきたい。

もともと物事を後ろ向きに考えがちの私だけれど、「園芸少年」を読んで、ほんの少し前向きな気持ちになれた気がする。

佳　作

マーフィーの法則

物質工学科１年　さんしょうお

きっかけは食パンでした。いや、正確にはバターを塗った面を下にして食パンを落とすというショッキングな出来事と言った方が良いでしょう。何の、といいますと、今私が書いている読書感想文の題材として選んだ本、『マーフィーの法則』に出会ったきっかけです。

それは、夏休みの終わり頃に起こりました。なぜよりによってバターを塗った面で着地するんだ、とぶつぶつ言いながら掃除する私の横で、母が呆れたように笑いました。そして、読んでみな、と手渡された緑色の本の表紙には、大きく「マーフィーの法則」とあり、その上にやや小さく二十世紀版と買いてありました。ページをめくると、そこには落下の法則と名付けられた法則が。内容は「バターを塗った面を下にして食パンを着地する確率は、カーペットの値段に比例する」というものです。私はなんだかおかしくなって、少し笑ってしましました。

それからもページをめくるごとにおかしな法則が飛び出てきます。約千六百ものこれらは、エドワード・アロイシャス・マーフィー Jr という昔のエンジニアが言った言葉が元になっていることから、まとめて「マーフィーの法則」と呼ぶのだそうです。法則の一つ一つには名前が付けられ、その内容を記した文のすぐ下には英語で原文が書かれています。

たくさんの法則の中から、気に入ったものをいくつか見つける事ができました。例えば「ウィロビーの法則」では「機械が動かないことを誰かに証明して見せようとすると、動きはじめる」とあります。これを発見した時には共感しすぎて思わず大きな声を出して喜んでしまいました。また、「不運の法則」は「母親は「こんな日もあるさ」と教えてくれたが、こんなにあるとは聞いていない」と、なんだかなぐさめの言葉をかけたくなるような法則です。きっと私も不運が続くとこう思ってしまうでしょう。

このように、『マーフィーの法則』には、きつい皮肉やにやっとしてしまう冗談が、たっぷり含まれています。そしてこっそりとした警告には、人々が取り返しのつかない間違いを犯さないための秘密が隠されているのではないでしょうか。

これから先、失敗の連続で、私は何度もうつむき、落ち込んでしまうのでしょう。しかし、その度に私は思い出します。この本のたくさんの法則たちを。私はきっと少し前向きになってつぶやきます。

「これは法則。自分だけが失敗して、ひどい目にあっているわけじゃないんだから」と。

笑って、共感して、ちょっと苦笑いして、新しい発見をさせてくれたこの本との出会いは、なかなか素敵な幸運でした。マーフィーさんと、母と、あの時の食パンに感謝したいと思います。

佳　作

「甲子園への遺言」を読んで

物質工学科１年　井田　大貴

「才能とは、最後まであきらめないこと」これは、二十八歳でプロ野球の打撃コーチになった高畠導宏さんの言葉です。

高畠さんは約三十年間、多くの選手に指導を行い、三十人以上のタイトルホルダーを育て上げました。しかし、五十代半ばで高校教師になるために通信教育で勉強を始めます。そして五年かけて教員免許を取得し、社会科教師として教壇に上がり、甲子園を

目指しました。

僕はこの本を読んで何かを始めることに遅すぎることはないということを学びました。他にも高校野球ができる今の時期を後で後悔することのないように、精一杯努力していこうと思いました。そして、伸びる人の共通点を学びました。

僕は、テストの時、まったくわからない教科を勉強せずに得意な教科ばかりを勉強することがあります。そして、テストが近くなった時に「もう間に合わない」と考え、あきらめることが多かったです。しかし、この本を読んでから十分でも多く勉強すれば一点でも多く点が取れるかもしれないと思うようになりました。僕は多くの場合、物事を後ろ向きに考えていました。しかし、この本を読んでから、「今できることを精一杯行えば何とかなる」という前向きに考えることができるようになりました。このことを部活動にも、勉強にも生かしたいと思います。

高校野球というのは、二年半という、とても短い期間です。高畠さんは、左肩の脱臼を隠したまま野球をし続けたために手首なども痛め、やがてバットが振れなくなってしまいました。

けがで野球ができないというのはとても辛いことです。ぼくも肩やひじを痛めた時に練習の手伝いや、走りこみなどで、まったくボールが触れず、やめたいと思ったことがありました。それにけがで野球をやめるというのは、試合に負けて引退することよりも悔しいことだと思います。「けがをしない選手こそが一流である」という言葉もあります。高校野球では、けがで後悔しないようにしたいです。

高畠さんは、伸びる人の共通点を七つ挙げました。一つ目は、「素直であること。」二つ目は、「好奇心旺盛であること。」三つ目は、「忍耐力があり、あきらめないこと。」四つ目は、「準備を怠らないこと。」五つ目は、「几帳面であること。」六つ目は、「気配りができること。」七つ目は、「夢を持ち、目標を高く設定することができること。」です。この七つのことは、難しいことですが、誰にでもできることだと思うのでこの七つのことを目標にして、野球に取り組んでいこうと思いました。

最後に高畠さんの言葉で「覚悟に勝る決断なし」という言葉があります。高畠さんは、自分が癌と聞いた時、取り乱さないと覚悟をしました。その言葉の通り、苦しそうな表情を一切見せずに亡くなったそうです。僕もそのような自分の信念を曲げない強い人間になろうと思いました。

エッセイの部

最優秀賞

共に生きるために

物質工学科1年　坂根　すず香

環境問題、それは現代社会でとても問題視されていることです。その中でも私が最も気になるものは異常気象です。近頃の日本は、今までにないような豪雪、猛暑などに見舞われています。そして今まさに起こっていることは台風の激しい襲来です。今ではこのような異常気象が日本だけでなく、世界全体を襲っています。自分自身でも肌に感じる気温や、体調の変化から感じられ、とても身近な問題として捉えることができます。しかし私が異常気象に関心を持った理由は、父と母が農業を営んでいるということにあります。

農家にとって避けては通れないもの、それは「自然との闘い」です。天候は自分たちに合わせてくれない、つまり自分たちがその都度合わせていかなければならないのです。その天候がこうも激しく表情を変えるとなると、農家には苦難の日々が続くのです。例えば、雪害による農作物の収穫不能、雪の重みによるビニールハウスの倒壊といった金額的にも大きな被害が出ます。さらに今回の台風では、雨や風により農作物が傷めつけられ、病気が発生しやすい環境となってしまいました。しかしここまで自然を怒らせたのは、他の誰でもない、今悩みこんでいる私たちです。私たちが暮らしやすさを求めたくさんの物を開発する中で、様々な有害ガスや毒物まで生み出してしまいました。それらが地球を蝕み、今の環境状態を作ってしまったのです。そして異常気象だけでなく、水質汚濁、大気汚染など重大な問題も引き起こしています。一体、この状況はどうすれば改善されるのでしょうか。

このようなまでに自然が荒れてしまった原因は、人間の心にあると思います。自分よがりで生きてきた私たちは、どれだけ自然に助けられているかを忘れてしまっていたのです。今、様々な環境保全運動の呼びかけが増えています。そうすることで意識も高まり、とてもいいことだと思います。ですが、心から「どうにかしなくては！」と思っている人はそ

う多くないと思うのです。「人がしているから。」という考えがまだあるのではないでしょうか。近頃スーパーで簡単に野菜や果物が手に入るようになり、食べ残しも増えています。さらに緑が減り直接的にその豊かさを感じられなくなり、感謝の気持ちも薄れていきました。そのような中で本気でこの問題を危険視するというのは、難しいとも言えるでしょう。また、子供たちはテレビゲームや漫画などの普及のより、自然と触れ合う機会すらなくなりつつあります。これから社会の中心と成りうる世代の者がこれでは、状況は悪化するばかりです。そこで今私たちに必要なのは想像力ではないでしょうか。未来はどうなるのかを想像するのも大切ですが、それより先に今この瞬間に誰かが苦しんでいることを考えてください。今まさに津波の恐怖に怯えている人、火山の噴火に怯えている人、さらには国土が海に浸食されつつある人など、あらゆる危機に直面している人が大勢います。私の家のようにたくさんの災害により、仕事もうまく進まなくなり苦しんでいる人もいます。それを自分のことだと思える想像力があれば、人事ではないと気づけるはずです。もし自分にそのような災害が降りかかったら、家族、友人、そして自分の命までも失いかねないのですから。そしてそれは本当に人事ではないのです。いつ目の前に恐怖が現れるか分かりません。何年も後のことかもしれないし、明日かもしれないのです。地球は自分たちが思う以上のスピードで、崩壊していっています。だから、そういった想像力を持てば、一つ一つの環境保全運動を「人がしているから。」ではなく、「自分たちが生きていくために。」と思えるでしょう。そしてそれは「こんな事をすればいいじゃないか。」という発想を生む力にも変わり、それぞれが一歩踏み出し、世界が少しずつ変わっていくと思います。私はそう信じたいです。

自然というのは私たちに物資、食料を恵んでくれているだけでなく、災害時には洪水、氾濫をせき止めてくれるはたらきもしています。また緑には心を癒すはたらきもあります。私も両親の手伝いとして農業をすることがあるのですが、実際に心が晴れすっきりとした気持ちになれます。考えてみてください。お部屋に観用植物が一つでもあると、落ち着いた気持ちになれると思いませんか？それが自然の一番魅力的な力といえるでしょう。今はストレス社会と言われているように、イライラしがちな生活をおくっている人が多いと思います。だから、その力は今の世界になくてはならないのです。だから、私たちは自然と共存する必要があるのです。助けられているだけではいけません。もとの世界にもどし、次は助け合う世界を築き上げましょう。それが何年後でもいいのです。とにかく今を変えていきましょう。

優秀賞

一言の重み

電気情報工学科１年　島根　奈月

私たちは日々、いろいろな人と関わりながら生活を送っています。人と関わっていく上で最も重要なのは言葉ではないかと思います。

例えば、あなたが誰かに連絡をしたい時、誰かとおしゃべりをしたい時、どんな手段を取るでしょうか。会話、メール、電話といった手段があります。会って話をすれば、相手の声、表情、様子を見ることができます。メールや電話はそれらの全てを感じ、読み取ることは難しいです。だから、一言一言が重要になってくるのではないでしょうか。メールのやりとりをする時、特にそのことを感じられると思います。自分からメールを送った時に、送信相手から返信がなかなか来なかったり、返信をもらえなかったりした時、少しでも不安になったことがある人はいると思います。返信がもらえなかった時、「無視をされてしまった。」と思う人は少なくないと思います。

相手が忙しかったのかもしれません。相手が「返す必要がない。」と思ったのかもしれません。実際返信がなかった時、送信相手が、なぜ返信をくれなかったのか、理由がわからない自分からすれば少し気になってしまうと思います。もし、返信がもらえたとしても、それがそっけない一言が来たとしたら、相手が今、どんな表情で、どんな気持ちなのか、わからないし、もしかしたら、悲しくなってしまうかもしれません。そして、誰かと会って話すときの一言一言は、もっと大きな役割を持ち、重くなってくると思います。もしも友達と遊んでいる時に誰かが、「つまらない。」と言ったらどうなるでしょうか。一緒に遊んでいた人の気分が悪くなって、さらにつまらなくなってしまいます。逆に、誰かが、「楽しいね。」

と言えば、周りの友達の気分は良くなって、もっと楽しくなると思います。たった一言なのに、まるで別のものです。そして、その場の空気や、そこにいる人の気持ちも、全く違うものになります。「ありがとう。」や、「おめでとう。」と言われたら、素直に嬉しくなり、おだやかな気分になり、人のぬくもりを感じます。

このように、一言は大きな力をもっています。たかが一言、されど一言です。一言は、とっても軽いけど、とっても重いのです。自分の一言で相手が喜んでくれる時もれば、悲しませてしまったり、傷つけてしまう時もあります。他人の何気ない一言で、嬉しくなったり、腹が立ったり、時には助けられたりします。たった一言で、未来は変わってくるのです。それは、言葉には魂があるからだと思います。私は、人を嬉しくさせたり、幸せにするような一言を見つけて、使っていきたいと思います。そして、そんな一言がたくさんの笑顔いっぱいの未来を見ていきたいです。

優秀賞

あたりまえな日々

物質工学科１年　小林　美優

「幸せになりたい。」

という言葉をよく友人から耳にします。わたしもよくそう思っていました。何か願い事をするときは、「幸せになれますように。」と、考えていました。しかし、幸せとは日々の生活の中にたくさんあるのだと、ある出来事をきっかけに気づけました。実際わたしは、自分にとっての幸せがなんなのか、分かっていなかったのです…。

今年の三月十一日、東日本大震災。日本中が混乱したことと思います。わたしはこの日、衝撃の映像をテレビで目にしました。町が波にのみこまれていき、さきほどまであった土地が全く見えなくなっていました。逃げ切れなかった人が波にのまれていく映像も見ました。流されている屋根や車の上にあがって、助けを待っている人もいました。すごく衝撃を受けたのを覚えています。しかし、津波の映像以外で、被災者の方々の映像もすごいものでした。行方不明の家族や知人を涙ながら探す人たち。食料が少なく少量の食べものを食べている人たち。電気がつかず避難所での夜を真っ暗の中、まだ三月なのでとても寒い思いをしている人たち。トイレは水が流れないので、異臭が漂うと訴えている人たち。もっとたくさんのことがあったし、わたしたちには分からない、テレビでは届けきれない大変なことがあったと思います。

わたしがこれらの映像を見て思ったこと。もちろん、自然に恨みを持ったし、恐怖も感じましたが、自分はどんなに幸せに過ごしているのだろうと感じました。あたりまえのように家族がいて、一緒にいてくれる友人がいること。毎日三食、間食なども合わせて、食べものが食べられていること。部屋でふつうに電気を点けてテレビを見たりゲームをしたりしていること。今まで自分はあたりまえのように過ごしてきて、これらのことを「幸せだな。」と改めて感じることはありませんでした。家族や友人がいる幸せ、食べものが食べられる幸せ、電気がある幸せ。すべてのことに感謝の気持ちを持つことができました。

晩ご飯が嫌いな食べもので、

「今日の晩ご飯最悪だな。」と、感じるのか、「毎日晩ご飯が食べられるだけで幸せ。」と、感じられるのか。少し前までのわたしだったら前者だと思います。前記以外で、今のわたしのふと感じる幸せは、あたりまえのように毎日を過ごしていること。大切な人と一緒に過ごせる幸せだったり、お風呂に入ったときの幸せだったり、勉強が分かったときの幸せだったり、ありがとうと言われたときの幸せだったり、睡眠する前の幸せだったり。挙げればきりがないのですが、あたりまえなことほど幸せが多いんだなと思いました。あたりまえな日々をあたりまえだと感じないこと、それこそが一番大切なことではないかと考えました。

幸せとは人それぞれ違って、自分の感じ方によって幸せと感じるのか不幸せと感じるのか変わってくるのだと思います。しかし、ささいなことでも幸せと感じられる、あたりまえをあたりまえだと感じない心。わたしはそういう小さな幸せも感じとれるだけの細やかな感受性を持った心を維持し、これからを生きていきたいと思います。

佳　作

こんな旅がしてみたい

機械工学科１年　**権藤　正也**

僕はどんな旅がしたいかと思うと、あてもなくさまよう感じの旅がしたいと思う。旅をするならある程度まとまったお金があった方がいいと思うが、どこに行くということもなく、適当に電車に乗ってぶらりと途中下車して、適当にどこかの宿やホテルに泊まる。といったような一人旅がしたい。

今いるこの場所から逃げたい、という願望もあるんだと思う。普段使うことのない路地裏を歩くだけでも「非日常」感は得られる。しかし、最終的には自分の家に帰る訳で、そうなれば結局「日常」の一部ではないかと思う。だからこそ、明日と今日の空は少し違っている。そんな旅をしてみたいと思う。

僕がいつも思うことは、夜の道を歩いてみたいということがある。流石に山道とか、そういう命に関わりそうな場所でなく、街灯に照らされた街を人知れず闊歩してみたいという願望がある。夜の街にも危険はあるだろうし、そういう意味でこうしたことがあまり快く思われないところがあるからこそ、背徳的な感覚でそう思うのだろう。

夜の街。それもそれでまた非日常を感じる空間だと思う。薄暗く、人のいない世界。少し肌寒いとなお良い。大人になりたい子供の好きな状況の一つと言えるだろう。どこかに消えていけそうな、溶けてしまいそうな、そんな思いがあるから、夜の街に憧れるのだと思う。

ここまで考えてきた旅する場所は、大体国内だ。海外に行きたくない、という訳では無いと思うのだが、想像しにくい、ということもあると思う。「夜の街」というものに関して言えばアメリカとかヨーロッパを想像できるが、やはり国内で十分という気持ちがあるのだと思う。

確かに、海外こそ一番わかりやすい非日常なのだろうとは思う。しかし、それを非日常と感じることができないのだ。それはアニメやマンガなどで日本以外の国に触れたことが無かったからかもしれないが、言葉の壁からしてもあまり外国に触れたことが無いのが実情だ。だからあまり旅に出たいとも思えないのだが、行ってみたら、価値観や人生観が変わるかもしれないとは思う。しかし、今のうちは、国内で十分ではないかな、と思う。何というか、外国に行きたいと思えるほど、この国を楽しんでいないからだと思う。

これまで「目的の無い旅」について考えてきたが、目的を見つけるとすると、自然と僕の足は秋葉原へと向かっていくことと思う。やはり昨今のサブカルチャー的な物、特に自分としてはゲーム、それもゲームセンターにあるような物で、更に言えば昭和８０年代を彩ったようなものが集まる場所と言えば、やはり秋葉原ではないかと思う。古きよきレトロゲームを巡る旅。言ってしまえば、それが一番僕のしてみたい旅なのかもしれない。

ここまで考えてきた中でも、やはり二人以上の人を連れて行きたいと思えないのが事実だ。なんというか、一人で、静かに旅をする。そういう考えが頭にあって、それが誰かと喜びを分かち合いたいということよりも上にあるということだと思う。ただ、気心の知れた相手なら話は別かもしれないが。また、どうせそうした旅に出るなら異性がいいが、叶わぬ願いなのでこの件については割愛する。

ここではない、どこか遠い場所。そこで今自分のいるこの場所を考える必要は無くて、何も気兼ねすることなく生きられる場所。それが僕の求める場所であって、それを探す旅がしたい。それが自分の望みだと思う。今のところ、それは叶わぬ夢だけど、いつか叶えることができたら、それはとても嬉しいなと思う。その時が来ることを願って、僕はこの世界を生きてゆこうと思う。

佳　作

再利用を心がけてゴミを減そう

電気情報工学科１年　**片岡　範行**

僕の叔父はスーパーのレジ袋を作っている会社に勤務している。社員十三人とパートのおばさんたちが働いている小さな会社だ。その叔父だが、最近元気がないように見える。マイバッグ運動が浸透してきたとかで、会社の売り上げが落ちているらしい。叔父は今年で６０才になる。転職するには厳しい年齢だと父が話していた。

追い打ちをかけたのが、レジ袋有料の報道だ。ゴミの減量のためにレジ袋の料金をお客が負担するこ

とになるかもしれないという。

ゴミの問題は切実だ。このままゴミが増えていけば全国の処分場があふれてしまう日がそう遠くない未来に訪れるだろう。そのときになってから慌てても遅い。ゴミを少なくする工夫を私たちはしなければならない。

しかし、ゴミを減らすということは、今まで使っていたものを使わなくなるということだ。無駄遣いはいけない行為だが、使わなくなってしまうものを作っている会社で働く人々のこともかんがえなければならない。

レジ袋を使わなくなることでゴミはすくなくなるだろうが、レジ袋を作っている会社の人たちはどうなるのだろうか。大きな会社ならば、他の製品を作るようにするのは容易だろう。しかし、叔父が勤めているような小さな企業は、すぐに他の製品を作るというわけにもいかない。新しい機械を導入するのにもお金がかかる。新しい取引先を探すのに時間も人手もかかる。会社は規模を縮小するか、倒産してしまうかもしれない。

最近、我が家ではレジ袋をゴミ袋として活用している。叔父を思いやってのことだが、ちょっと工夫するだけで大きなゴミ袋を使わなくてすむようになる。例えば、紙パックに入った牛乳やウーロン茶。飲み終えたら側面をつぶして、クルクルと丸めれば小さくなる。肉や魚の入ったパックも軽く水洗いをして、はさみで切るとかさばらない。少し手間をかければゴミはかなり圧縮される。ゴミでいっぱいのレジ袋を持つとずしりと重い。

レジ袋を何かに利用できないだろうかと考えないからゴミになる。しかし、いろいろと工夫すればレジ袋もゴミ袋に早変わりする。他にも活用方法があるかもしれない。みんなでいろいろな方法を考えれば、ゴミだったものが製品として利用できるようになる。

ゴミの減量の一環として、近い将来レジ袋は有料化になるかもしれない。環境の問題を考えると当然のことなのだろう。しかし、わたしたちはそのために犠牲になる叔父のような人たちの存在を忘れてはならない。

環境と製造の調和を考え、どうすればみんなが幸せになれるかを考えていくべきだと思う。作る人たちも困らない、環境を守れる、難しいがその二つを両立させるのが、二十一世紀に生きるわたしたちの課題と思う。

法律を守ってまじめに働いている人が犠牲になっての環境対策であってはならない。

佳　作

頑張れる、日本

電気情報工学科１年　ゴ　　リ

東日本大震災が発生してから、半年以上が経ちました。震災が発生した当初は、テレビや新聞などで、信じられないような被害ばかりが伝えられ、ただただ、驚くばかりでした。あまりにも甚大な被害ばかりで、「もう東日本はダメなんじゃないか。」と思ってしまうこともありました。

しかし、東日本は、日本は、ぼくが考えていた程、弱くなんかありませんでした。日に日に、少しずつ活気を取り戻していき、今では、復興を目指して、観光にまで力を入れるぐらいまでになってきました。もう、あの頃の東日本とは違います。

ここまで東日本が復活したのには、その地や、周辺に住む人々の奮闘などももちろんのこと、やはりあの言葉が大きく関わっていると思います。「頑張ろう、日本」。この約半年間、様々な場所で、この言葉を聞き、見てきました。オリンピックなどの時の「頑張れ日本」とは違い、今回の「頑張ろう、日本」は、日本全体が一丸となって頑張ろうという気持ちが伝わってきます。

困っている人がいたら、助ける。当たり前のようなことで、なかなかできないことでもあります。形はどうあれ、一人一人が、自分にできることは何かを考えて、行動に移していけば、大きな力になるということがわかりました。

ボランティアや募金などでも十分助けになると思いますが、今回ぼくがすごいと思ったのは、被災された方々への、応援やメッセージです。被災されて、心を傷めた方々にとって、大きな支えとなったと思います。

物は無くても、行けなくても、自分の思いを伝えて、人の心の支えになれるということは、とても素晴らしいことだと思います。

送られてくる物資とは違って、同じ物は一つもありません。一つ一つに、それぞれの気持ちが込もっていて、温かいです。もし、ぼくが被災した中の一

人でも、絶望していたとしても、たくさんの人々から寄せられたメッセージを、ラジオなどで聞くだけで、「頑張ろう。」という気持ちになれると思います。

確かに、東日本大震災で、数え切れないほどの被害を受け、たくさんの物が失われました。このことは、決していつまでも忘れてはならないと思います。

でも、今回の震災を通して、日本は、以前よりも強くなれたと思います。日本全体が一つになれたような気がします。

最近、日本は、地震や台風などによって被害を受けることがよくあります。相手は自然なのでどうしようもないかもしれません。しかし、日本はそれらの困難に立ち向かう力を持っています。

これからも、また、日本に様々な困難が、迫ってくるかもしれません。そんな時に大事なことは、強い心を持つ、助け合う、といったことだと思います。今、自分にできることは何か、考えることだと思います。そして、今はある、当たり前の生活を大事にして、感謝しながら生きていけばいいと思います。

佳　作

ふと感じる幸せ

電気情報工学科１年　**中山　健太**

人には誰でも、幸せを感じる瞬間があると思う。一口に「幸せ」と言っても、どういうことが「幸せ」なのかは、人それぞれなのではないか。最近、僕が感じる幸せは、日本に生まれてきたことと、幸せについて考えられるほど平和に生きているということである。

かなり大まかになってしまうが、最近は「生きる」という幸せについて考えられるようになってきた。まず、日本に生まれた幸せだが、自分が日本人であることで、ある程度不自由のない暮らしができるという意味である。世界中を見てみると、日本人のようにテレビを見たり、ゲームをしたりできる人もいれば、発展途上国に行くと、その日一日を生きていくことに必死になる人もいる。

ここでふと思うのが、日本人と発展途上国の人たちとでは、幸せの「意識」が違うのではないか、ということである。先ほど挙げた、生きることに必死になる人たちにとっては、「生きていく」こと自体が幸せになっていると考える。ただ、僕たち日本人が生きることに必死になることなんてあるだろうか。必死になるとしたら、目標を達成しようとしたり、何かを成し遂げようとしたりする時だと思う。僕自身、目標を達成した時は嬉しいし、幸せだと感じることもある。こうして考えてみると、ふと感じる幸せといっても、立場によって変わるものだと思う。だからこそ、僕は日本に生まれて目標に向かって生きられることに、幸せを感じている。

そして、平和に生きられる幸せだが、考えるきっかけになったのが東日本大震災だった。テレビで、荒れ果てた土地や避難所で暮らす人たちを見て、一日三食食べられて、学校にも行けるという暮らしができるだけで平和なんだなあと思えるようになった。避難所の人たちが、「家族に会いたい」とか「故郷に帰りたい」と言うのを聞くと、「ふと」というより「しょっちゅう」自分が幸せ者なんだと感じてしまうのだ。

こうして、幸せについて考えるうちに思ったのは、「幸せ」というのは状況や立場によって変わってしまうものだ、ということである。最初に僕は、生きること、生まれてきたことが幸せだと言った。それが大まかだとも言った。今の日本人の中で、こんな基本的なことに入り浸る人は少ないかもしれない。しかし、考えれば考えるほどそうなってしまう。特に最近は、高専生になってから考えることが多くなり、少しずつ「生きる幸せ」について考えることも多くなってきた。もしかしたら、具体的に幸せを感じることがないからかもしれない。

だからこそ、「生きる」幸せについてふと感じる機会が少ない僕たちにとって、自分にとっての幸せが何なのか考えてみるのは良いことではないだろうか。少なくとも、僕は良いことだと信じているので、「生きる」ことについて、「感じ」られなくても、一生かけて、「考えて」いきたいと思う。